

# ミステリ読書案内

2022. 9. 17 発行元

第397号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 歴史・時代ミステリその5

第385号に続いて「歴史・時代ミステリ」の第5弾。今回は大作2冊プラス一冊を取り上げる。大作の2冊は多くの人に読んでほしい作品。長いので読むのに根気が要るけれども、充実感は得られるはずだ。

### 「英雄」に注目しすぎない

私は歴史を見る時に歴史上の人物に注目しすぎないようにしている。織田信長、坂本龍馬、源義経…人物に好きだとか嫌いだとかの感情はまったく持っていない。「歴史は『英雄』によって作られる」なんて思っていないからだ。

歴史を理解しようとする時、個々の人物研究に嵌まり過ぎないことが大切。その背後にある世の中全体の流れや、人物を支える土台の部分を把握していくことが重要だと思う。世の中のブームに乗った「人物中心の歴史」に流されないようにと

考えている。

ただ、ミステリの世界で歴史上の人物が登場する作品には興味がある。今までの定説を覆す思い付きのような発想も大歓迎だ。時には馬鹿馬鹿しくても小説として楽しめるものは良いと思う。

ミステリ作家の中で私が共感を持つのはレイモンド・チャンドラーやコーネル・ウールリッチ(別号ウィリアム・アイリッシュ)のように「孤独」を感じさせてくれる人。八方美人的な節操のない人気集めの作家に魅力は感じない。「キャラクター小説」にあまり賛成しない理由はその点にも結びついている。

### 新美健「六莫迦記」

2020年ハヤカワ時代ミステリ文庫。この新しくスタートした「ハヤカワ時代ミステリ文庫」だが、読んでみてあまりお勧めしたいと思うような作品には出会わない。(田中啓文の『信長島の惨劇』だけは特別!) もう少し収録作品の出来を吟味してほしい。

この新美健の『六莫迦記』。副題は『これが本所の穀潰し』。江戸時代の小身武者・葛木家の六つ子兄弟が主人公。「あらずじ」には「呆れて笑いがとまらない、ろくでなし大騒動」と書いてあるが、素直なユーモアではない。ドタバタだけど、救いがない。最後になって、隠されていた背景が説明されて、少しだけミステリ風な味付けに至るのだが、基本的にはとてもミステリとは思えない。

### 隆慶一郎「影武者徳川家康」

1989年新潮社。現在は新潮文庫に上中

下の3冊になって納まっている。当時私は全く注目していなかったが、その年の『このミス』ランキングで第9位に入り、その後の『このミス10周年』の10年間ランキングで第6位となり、「読まなければならないな」という思いにさせられてしまった。発想の鮮烈さと「大作」ということで、支持されたのだと思う。

読んでみて思うのは「私の基準では『ミステリ』ではないな」ということ。作者も「ミステリ」という意識はなかったのではないかと思うのだが。関ヶ原の合戦の場面から始まる。徳川の本陣に並ぶ徳川家康とその影武者・世良田二郎三郎の二人の姿。そこへ石田三成・西軍の島左近の手になる元武田配下の忍びが密かに近づき…。そして影武者が主役の長大な物語が展開していく。秘密を知る者はほんの数人。何事もなかったかのように戦いに勝利を収め、二郎三郎が自分の命を永らえるための必死の策略が続く。対立の軸は徳川秀忠と柳生宗矩に明確化されていく。史実にある部分をできるだけ生かすようにして、関ヶ原以後の体制作りから、征夷大將軍と幕府の出発、外国勢力とキリシタン、影武者(大御所)の居城としての駿府の街づくり、そして大阪冬の陣と夏の陣…と時間は流れる。作者の綱渡りに近い出来事の理屈付けが読者を圧倒する。

### 島田荘司「写楽 閉じた国の幻」

2010年新潮社。『週間新潮』に連載

された後単行本になった大作。この年の『このミス』ランキング第二位に入った傑作ミステリ。

題名のとおり江戸時代の「東洲斎写楽」をテーマにしている。寛永6年。独特の浮世絵を送り出しながら一年に満たない活躍期間で消えてしまった写楽の謎。物語は現代の場面からスタート。浮世絵研究家の佐藤貞三はちょっとした瞬間に事故で子どもを失ってしまう。回転式のドアに挟まれてしまったのだ。ドアに構造的な欠陥があったのか…。このことをきっかけに貞三の家庭は崩壊し、その反動で写楽の謎にのめり込んでいく。一枚の肉筆画に残されていた文字後を見つめているうちに気付いたことは…。写楽の人物像に関してはさまざまな方面からの憶測がなされている。最も不思議なことは、同時代に生きていた絵師、版元などの関係者が写楽に言及していないこと。大きな話題になったはずなのに、なぜか誰もが無視した形。島田荘司がたくさんの資料を元に推測を積み重ねて構築した写楽の正体は…。新鮮な驚きを与えてくれる。